（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　高木　周

本論文は、『とはずがたり』を中心に、『阿仏の文』『十六夜日記』など中世日記文学作品の表現について、主として物語・和歌との関連を考察したものである。序章ののち、本論を三部計十章に分けて構成している。

第一部は阿仏尼の日記の研究で、第一章は『阿仏の文』につき『栄花物語』の后像を範として仰いでいることを解明、一例として理想的人物として語られる「三条の后」を新たに『栄花物語』中の藤原娍子に比定する。第二章は『十六夜日記』の鎌倉滞在中の贈答歌群の解析に基づき、そこに息為相が歌道家を継承し自分の死を超えて本歌群が読み継がれることへの祈願が込められていると指摘する。

第二部は『とはずがたり』論で、第一章は父の死をめぐる行文を論じ、前半を父の死を物語と重ねつつなおそこから逸脱する悲境としてかたどるもの、後半をその悲境を託宣に基づく運命として甘受する姿を描くものと規定し、合わせて自己の変貌を語ろうとする執筆動機が存することを明らかにする。第二章は本書中に語られる「傾城」を、遁世への憧れと恐れとをともに託す両義的な存在であると規定する。第三章は巻二における「思ひ切る」の語の分析を行い、そこに出家への願望と後深草院への執着の二面性を捉え、それが執筆動機に関わるものであると指摘する。第四章は本書で反復される歌語「いつまで草」「なるみ」「心の色」を調査し、それぞれに男たちとの関係の予示など、枢要なテーマとの繋がりが存することを立証する。第五章は故人の形見の和歌の典拠を新たに指摘し、死者との宿縁を書き遺そうとする作品のモチーフを解明する。

第三部は中世女流日記の西行受容を論じたもので、第一章は『うたたね』などの西行歌からの影響を具体的に指摘し、それが失意から出奔に至る心象風景の描出にあずかっていることなどを考察する。第二章は『とはずがたり』巻四の東国下向における西行歌の影響を掘り起こし、それが未来へと旅立ちつつも過去に囚われざるをえない主人公の造型に寄与しているとする。第三章は同書巻四・五に語られる二条の後深草院思慕における西行歌受容を明らかにし、それが西行の生にならうことと院との宿縁を語ることとの二つの執筆動機を結合する要の役割を果たしたと論じる。

本論文は、作品中の具体的な表現を、さまざまな文献を博捜する分析に基づき解釈したうえで、それぞれの作品の執筆動機や主題に関わる根本的な問題を明らかにしている。他の中世日記作品との関わりなど今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。